

明治大学マンドリン倶楽部 室蘭演奏会

本井 理

明治大学マンドリン倶楽部に対しては、マンドリン・オリジナル曲を主体に演奏活動を展開する「正統派」自認の同好団体に色眼鏡でみる向きが多く、北海道でも故・九島勝太郎先生（註：生前は北海道大学チルコロ・マンドリニスティコ「アウロラ」常任指揮者）の「明大嫌い」は関係者の間では有名な話であった。

また、マンドリン・ギター関係者以外の音楽愛好者の間でも「低俗だ」とか「取るに足らない」との評価を多く耳にする。私も「音楽として論評せよ」といわれれば、積極的なプラスの要素は見出し難いし、私の著述を知っている方ならば「本井さんが明大マנקラの演奏を評価するなんてあり得ないだろう」と思っているに違いない。

それでも私は明治大学マンドリン倶楽部の来道公演には毎年欠かさずに通っている（小樽演奏会に出掛けることが多いが、本年は所属団体の練習日と重なったので一日前の室蘭演奏会に行った：小樽開催は毎年恒例となっているが、室蘭は1999年以来の開催である）。実は、私は大学1・2年当時、マンドリンクラブと応援団を掛け持ちしていたので(!)、限りなく体育会系に近い明治大学マンドリン倶楽部の現役部員に共感してしまい、熱烈なファンになっているのだ。

地方回りの演奏会のステージ構成は、第1部「クラシック音楽」、第2部「(古賀メロデーを含む)日本の音楽」、第3部「(ラテンを含む)ポピュラー音楽」で、これが定着したスタイルとなっている。このうち第1部と第2部では男子部員は学生服、女子部員も揃いの黒のスーツを着用し、もちろん茶髪や金髪の部員はいない。実に爽やかである。

話が逸れるが、私はマンドリン・ギター合奏団に所属しているか否かを別として、およそ大学生たるものは、茶髪や金髪にすべきではないと信じている。

理由の第一は、染髪料が髪の毛の遺伝子を損傷し、子孫に悪影響を及ぼす懸念が拭えないことである。だから、生殖能力を失った、もしくは子造りの義務を果たした中高年が白髪染めをするのは認められても、これから結婚して子孫を残す義務を負っている若年層は絶対に髪の毛を染めてはならない。それは次代の子供達、ひいては人類に対する犯罪行為かも知れないからである。また、こうした科学知識に基づく疑いを持たない者に大学で学

ぶ資格などない。

理由の第二は国際的な問題であるが、「世界の常識」では、自民族固有の色以外に髪の色を染めているのは、男はチンピラ（＝社会の脱落者）、女は売春婦と相場が決まっているからである。さらに女性の場合、底高の靴を履いて携帯電話で話しながら歩いていれば、まず間違いなく売春婦であるといつてよかろう。

よく沖縄等で米兵が婦女暴行をはたらいたという報道に接するが、私は暴行された女性の染髪の有無や服装、時刻や場所なども問いたいと思う。婦女暴行は女性に対する人権侵害かつ明白な犯罪行為であり、それを犯した米兵は絶対的に悪い。しかし、彼らの一部には「国際基準によって売春婦と認識されたので、ちょっかいを出した」という言い分があるかも知れないのだ。

理由の第三は、日本文化の伝統的な視点によるものである。近年の茶髪や金髪の流行は芸能人やスポーツ選手から広まったと思われるが、戦前まで日本では芸人（力士が「男芸者」と呼ばれていたので、今日のプロ野球選手やJリーガーも「芸人」の系譜に連なる者と捉えてよい）は「河原乞食」として差別され、一種のアンタッチャブルになっていた。「観阿弥・世阿弥父子」や「出雲の阿国」の例をあげるまでもなく、彼らは現世と異界を媒介する役割を担う（神霊の前で芸事や勝負を捧げ、鎮魂したり吉凶を占ったりする）が故に異装をし、併せて観衆（←参拝者）の性欲（男色を含む）を満たす役割も負っていたのである。

このように、茶髪や金髪にすることには科学的あるいは文化人類学的に重要な意味があり、近代社会の指導層にある知識階層に属する人間は行なわない習俗である。したがって、インテリゲンチアの候補生たる大学生はしてはならないし、そのような若者達には国の将来を託することはできない。北海道のH大やO商大の部員諸君も明治大学マンドリン倶楽部を見習うべきだ。もちろんF女子大もカトリックのミッションスクールであるからして部員は絶対に髪を染めてはならない。

閑話休題、音楽の話に戻ろう。

明治大学マンドリン倶楽部は、日本のマンドリン・ギター合奏団としては珍しくラテンを得意としており、「本場もん」との違いも目立つものの、音楽の三要素（リズム、メロディー、ハーモニー）のうちリズムについては確かなものを持っている。もちろん、それは打楽器（ギターパートの兼任が多い）の充実によるところが大きく、管楽器パートも固有の編成のため、マンドリン属がなくとも完全に音楽として成立していることを指摘しなければならない。

メロディーについては、古賀メロディーをレパートリーとしているだけにマンドリンに歌わせる局面が多く、この点では並みのマンドリン・ギター合奏団の上を行っている。

ただし、ハーモニーには決定的な問題点がある。明治大学マンドリン倶楽部では、マンドリンのトップやサブ・トップの音をマイクロフォンで拾い、音響を施して演奏している。これによって管楽器や打楽器を入れた演奏を成立させているのであるが、マンドリンの薄くて細い金属音が妙に浮き上がってしまい、何とというかチャラチャラと安っぽい音楽になってしまっているのである。

また、マンドラ・テノーレもマンドリン同様マイクロフォンで拾っているが、マンドリンとマンドラ・テノーレ、マンドラ・テノーレとマンドセロとの「はもり」による厚みは感じられない。

今回は新作CD『リラ・マンドリーノ』のPRも兼ねて、地方公演では珍しくマンドリン属とクラシック・ギターおよびウッド・ベースのみの編成で『りんご追分』を演奏したが、以上に加えてギターとベースによるハーモニーの厚みも感じられないことが判明した。

しかし、明治大学マンドリン倶楽部の手法は、別の意味でもっと注目されてもよいように思うのだ。私はかねてより洋楽の他のジャンルと比べたマンドリン・ギター合奏のウィークポイントとして擦過音（ピックで弦を弾く際に生じる「カチカチ」「パタパタ」「ポコポコ」音）発生のデメリットを指摘してきた。よくよく考えてみれば「音響技術によって擦過音をカットする」というのも、一つの解答ではないだろうか。確かに明治大学マンドリン倶楽部におけるマンドリンの音は複共鳴を感じたものの、擦過音はあまり意識せずに済んだ。

また、音響による音量増幅があれば、演奏人口が増えている吹奏楽やロック・バンドなどとの共演も可能となるので、マンドリン・ギター合奏が生き残るための手段として真剣に研究すべき価値があるのかも知れない。明治大学マンドリン倶楽部の演奏は、私にこのようなことを考えさせてくれたのである。

なお、楽曲構築の是非については敢えて論評しないが、いつも一つだけ不快に感じるのが、第3部で観客から指揮者を選び、その人を困らせて笑いを取るパフォーマンスである。これだけはお客様に失礼なので、速やかに取り止めて、ほかのパフォーマンスを考えてもらいたいと思う（2005.9.7.18:00～、於：室蘭市文化センター）。